

### Ⅲ. 特別報告

---

## 日本近現代史研究についてのスポーツ

関西学院大学教授 高岡 裕之

**尾崎正峰**：本日は、非常に多くの方が学内、学外からいらっしゃっていますので、私たち運動文化科のゲスト研究会の講師として高岡裕之さんをお招きしたことの意図、ねらいを簡単にお話したいと思います。もっとも大きな契機は『幻の東京オリンピックとその時代』（青弓社）という本を私たちの仲間である坂上さんと共編著で出されたことです。そして、高岡さんは、本学経済学研究科の森武麿先生が編まれた『1950年代と地域社会』（現代史料出版）の中で「スポーツ振興と地域」という論考を、『健康ブームを読み解く』（青弓社）の中で「戦争と健康」という論考を寄せられています。これらの論考を、私自身が興味深く読ませていただいたことがあります。こうした点から、幅広い研究を展開されている高岡さんに、「日本近現代史研究についてのスポーツ」というやや大きなテーマでお願いしました。

お集まりの皆さんには、活発な議論をしていただければと思います。

**坂上康博**：司会を担当します坂上です。これから1時間ほど高岡さんに報告していただき、その後質疑応答ということで進めていきたいと思っています。気楽に、率直な意見交換ができればいいな、と思っております。それでは、よろしく申し上げます。

### 1. ファシズムとスポーツ

#### 1) 1980年代のファシズム研究

**高岡裕之**：関西学院大学文学部の高岡です。大勢の方が来られており大変緊張しておりますが、つ

たないお話をさせていただきます。

「日本近現代史研究についてのスポーツ」というのは、坂上さんからいただいたお題なのですが、今日のところは、「私の研究とスポーツ史」ということで、極めて個人的なお話をさせていただきます。

僕は1981年に大阪市立大学文学部に入りました。最初は古代史をやろうと思っていたのですが、3年生のとき、なぜか近現代史に（今となってはよくわからないのですけれど）変わってしまいました。その時からファシズム研究をしようと思っており、卒論は戦時期の社会事業＝厚生事業の成立過程を調べて書きました。85年に大学院に進んで、修士論文をどうするかというあたりで、当時の研究状況なんかを含めた議論をしないといけない、ということになりました。

80年代の半ばは、ファシズム論が大きく変わりつつあった時期でした。70年代までは「天皇制ファシズム論」（筆者の「天皇制ファシズム論」理解については、「ファシズム・総力戦・近代化」『歴史評論』645号、2004年を参照）が通説的位置を占めていたわけですが、そういう議論がさすがに崩れてきて、それに変わるものとして山口定さんの『ファシズム』（有斐閣、1979年。2006年に岩波現代文庫として新版が刊行）で展開されている、いわゆる「同盟理論」が大きな影響力を持つようになっていました。

同盟理論のポイントは、要するにファシズムというのは、ただ単なる反動ではなく異質な政治勢力の同盟である。誰と誰が同盟するかというと、既存の支配層の反動化した勢力（「権威主義的反

動)とファシスタ党やナチ党のような「擬似革命」(擬似社会主義的大衆運動)であるという点にあります。これはマルクス主義の古典的なファシズム定義、つまりファシズム＝「反革命」＝金融資本の反動的テロ独裁という把握に対する批判でした。80年代の日本の現代史では、この議論に依拠した研究がとりわけ労働運動・労資関係との関連で展開されていました。

しかしそういう理論状況のなかで、僕がむしろ関心を持ったのは、村瀬興雄さんの『ナチズムと大衆社会』(有斐閣、1987年)や、森川貞夫さんも訳者に加わっておられるヴィクトリア・デ・グラツィア『柔らかいファシズム』(有斐閣、1989年)のようなファシズムの「日常史」でした。これらの研究が面白かったのは、それまでファシズムというと反動的で社会を抑圧するというイメージだったわけですが、そうじゃない。たとえばナチスがつくったKdF(クラフト・ドゥルヒ・フロイデ＝「喜びを通じて力を」の意味、いわゆる「歓喜力行団」)では、ドイツ労働戦線の会員を大きな船に乗せてクルージングに連れて行く、ワーグナーのコンサートなんかを格安で提供するなど、民衆に娯楽や余暇を提供する「厚生運動」を展開している。その本家がイタリア・ファシズムのドーポ・ラヴォーロ(「労働の後」の意味)で、グラツィアの研究は、この組織が旅行やスポーツなどの「厚生運動」を盛んに行っていたことを詳細に明らかにしたものでした。

僕がこうした研究に興味をひかれたのは、大阪朝日新聞を見ていると、戦争中の日本でも旅行とかハイキングとかスポーツが盛んに行われている。これはいったいなんだろう、と疑問に思っていたからです。

ところで日本ファシズム研究で娯楽や「厚生運動」を論じるというのは、ほとんど非常識なことと思われていました。レジュメに長々とあげていますが、日本ファシズム研究では、丸山真男が敗戦直後に、日本のファシズムは福利厚生施設においてナチスなんかに比べて比較にならないくらい

お粗末だった(『現代政治の思想と行動(増補版)』未来社、1964年、pp.54~57)、と述べたことが大前提とされており、丸山のお弟子さんの山口定さんに至っては、「日本の天皇制ファシズムにおいては、イタリアやドイツの場合のように、労働者もしくは勤労者を対象とする厚生事業と、それを媒介にした動員の体制は存在しなかった」(『ファシズム』p.226)と断言されていました。大先生が「なかった」といわれているものを「あった」というのはなかなか勇気のいることで、なんとかそうじゃないことを示そうとしたのですが、うまくいきませんでした。

## 2) 幻の修士論文から厚生運動論へ

実のところ、僕は修士論文を2回書いています。最初マスター2年の時に書きかけたものは完成しませんでした。その幻の修士論文が厚生運動論でした。中身は大阪市を中心とした厚生運動の研究で、ラジオ体操とかハイキングを扱ったものだったのですけれど、これを上からの民衆統合という形でやっ払いこうとすると、どうもうまくいかなかったんです。

じゃあ体育とかスポーツとかを、歴史の領域でどういう風に扱えばいいかと考えていたとき、ちょうど入江克己さんの『日本ファシズム下の体育思想』(不昧堂出版、1986年)が出ました。しかし、要するに、みんな天皇制ファシズムを支えていたという、はじめに結論があるような議論には違和感がありました。結局2年目に提出した修論は、医療組合運動を扱ったもので、全然違う領域に逃げた形になりました。

ちなみに88年の歴史学研究会大会(現代史部会「ファシズムと民衆動員」)では、井上茂子さんがドイツ労働戦線の問題を、KdFとかを含めて民衆統合の問題として報告されました。それを受けて僕の先輩である三輪泰史さんが、「日本のファシズムでも娯楽とかで統合していく、そういう話があったんじゃないか、せつかくの機会だから議論してください」と発言されたら、須崎慎一さんが

「日本での娯楽は戦争なんだ」という発言をされて、戦争そのものが民衆を統合する娯乐的なものなのだ、というやりとりで終わってしまいました。日本の現代史研究者には、日本ファシズムが娯楽や文化を組織していくという発想が全然ないんだ、ということを感じました。

そうこうしていくうちに、91年に坂上さんという人（笑）が書いた「国民統合装置としてのスポーツ」という論文が『歴史学研究』に掲載されて、すごく印象に残りました。この論文は色々な意味で画期的で、戦後の現代史研究は共産党ベースで考えていますので、3・15事件あたりから暗い時代になるということが強調されていたのですが、市民目線でみればそうじゃない部分がいっぱいある。スポーツ熱の広がりはその典型なのですが、そういう部分をとらえる上で、坂上さんは見事に成功していると思いました。僕自身はそもそもスポーツっていうのは、どのように扱っているのかわからない部分があったので、ああすごいなあ、もうスポーツはやらなくていいやと（笑）。ただ、その時に違和感がなかったわけではなくて、坂上さんの研究は日中戦争からは違うんだよ、という話ですね。日中戦争までは国民統合のためにスポーツをやっているけど、戦争が始まるとスポーツはダメになっていく、という話は少し違うんじゃないかと思いました。

ともあれ、スポーツで論文を書くのは難しいと思ったので、じゃあちょっと違う形でやってみようと思いました。88年ごろから赤澤史朗さんと北河賢三さんを中心とするファシズム期の文化の共同研究がはじまって、そこで旅行とハイキングを扱うことになって、「観光・厚生・旅行」という論文になりました（赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、1993年）。これは未提出修士論文の厚生運動論を旅行・ハイキングに特化させたようなものでした。この問題が何とか論文化できると思ったのは、観光客の推移についてある程度統計的に裏がとれたからです。そうすると日中戦争下の40年前後がピークになるん

ですね。結構いろんなところでそういう現象を確認できたので、これは大丈夫だと思いました。

ですから日本の戦時期では、ヨーロッパと違ってせいぜい1泊程度、もしくは日帰りなんだけれども、旅行やハイキングが隆盛していた。それはやっぱり大衆文化現象です。この場合の大衆というのは、オルテガが言ったように、どこに行っても人がいっぱいいるということです。そうした現象が戦時下に起こっていたことに大きな意味がある。そういう大衆は、結構言うことを聞かない。悪さもしますし、逸脱もします。そういう問題を旅行・ハイキングを素材としてやってみたことになります。

その後、この時の共同研究をベースに、赤澤さんと北河さんらと資料集を作ることになって、『総力戦と文化』（大月書店）を出すことになりました。全3巻のうち、2巻までは出たのですが、書店の事情で第3巻はもう出ないようです。

実はその時にかなり体育関係の資料を集めました。赤澤さんと二人で東京の民和文庫にも行って、体力章検定とかも含めて体育・武道関係の資料をかなり集めたんです。本当は第2巻に入れるつもりだったのですが、体育・武道関係の資料は量がありすぎて、これは別にしないとだめだということになってお蔵入りになってしまいました。ともあれ体育・武道方面にも、一応目配りはしていたわけです。でもそれをどう処理すればいいかというのは結構難しい話で、この資料集を作る時、産報の研究論文（「大日本産業報国会と「勤労文化」」、『年報日本現代史』第7号、2001年）を並行してやっていたのですけれども、もともと産報体育とかも視野に入れていたのですが、結果として取り上げたのは音楽と演劇だけになってしまいました。

ともかく体育・スポーツは扱いにくい。なぜかという、演劇とか音楽に関わる文化運動の人たちはやたらに文章を書いています。ともかく彼らは理屈っぽい。ところがスポーツの人たちはあまり文章を書かない。普通のスポーツの文献を見て

も、出てくるのは記録なんですよ。誰が何秒で走ったかとか(笑)。そういう記録はいっぱいあるのですけれど、スポーツに関わる理屈がない。また記録以外の事実関係についても、結構いい加減ですね。扱いにくいなあと思ったひとつの理由がその辺のところですよ。

## 2. 地域のなかのスポーツ

### 1) 兵庫県小野市史の編纂

でも、違った意味でスポーツが重要だと思ったのは、自治体史の経験です。僕は兵庫県の『小野市史』の編纂委員を10年くらいやり、最終的に2004年によく近現代の通史編を出しましたが、これをやっている間にスポーツの重要性を痛感しました。

普通、自治体史のなかでスポーツ史にページを割くことはまずありません。ところが『小野市史』をやっている間に、何に気がついたかという、戦前の段階でスポーツがすごく盛んだったことです。たとえば1930年代の小野では、旧制小野中学の学生だった井上増吉という人が、中等学校陸上競技選手権大会で総合優勝しています。そのときの地元の受け止め方が新聞に出ているのですが、要するに、地元を挙げての大歓迎です。小野町と小野駅の間はずいぶん離れているのですが、みんなで駅頭まで出迎えて、町長が「よくやってくれた」と言って涙を流して握手する。それから凱旋パレードです。ちなみにこの井上という人は、戦後県体協の副会長となり、1976年には小野市長に当選しています。彼は地元の英雄なんです。彼の時に作ったのではないのですが、今でも小野市には「井上増吉賞」という市民スポーツ賞があるくらい、地元スポーツ界の象徴的存在となっています。実は小野市史の時も、こういう事実をどう考えたらいいのかよくわかりませんでした。わからないままに書いたわけですが、とにかく地域社会にとって、スポーツが非常に大きな意味を持っていることを痛感したのがこのエピソードです。

また小野でびっくりしたことは、小学校のスポーツ、とくにバレーボールが盛んだったことです。『小野市史』に当時の朝日新聞の記事を引用しておいたのですが、これは中番小学校の排球部の女子が26戦25勝1敗で、優勝旗のみで11本もあるという。どっから取ってくるのかと思いましたが、それだけの数のバレーボール大会が開かれていたのです。そのなかでダントツに強い小学校チームが登場してきて地元の関心を集めている。こうした事実をどう考えたらいいのか、いまだによくわからないところがあります。

それから、女子はバレーボールなのですが、男子は相撲です。相撲ブームが昭和に入って起こって、新聞を見ていくとだんだん相撲大会が増えていくのがわかりました。だいたい神社で開かれるのですが、それに並行して学校の相撲が盛んになって、甚だしいのに至っては女子にまで相撲をさせている。男女で相撲を取らせている学校もあったようです。ただこうした相撲熱は、兵庫県一般ではない。神戸市から小野地域に転校してきた子どもが、みんなが相撲をやっているのだからびっくりしたと回想しています。ともかく1920年代の終わり頃から、小野地域では、男子は相撲、女子はバレーボールという学校文化が成立していたことは間違いないように思います。

でも書けなかった問題もあります。そのひとつは青年団の話です。なぜ書けなかったかという、小野市域の青年団の機関誌がなかったからです。ひとつとなりの上東条村の青年団の機関誌が日本青年館に残っていますが、それを見ると陸上競技を盛んにやっていたことがわかるのですが、残念ながら小野市域では機関誌がなかったので書けなかった。

また地域有力者層、名士層の間にテニスが流行していたことは新聞で確認できました。いくつかのクラブの名前も出てくるのですが、いかんせん実態がわからない。テニスの試合があるよというベタ記事が掲載されるだけです。小野には屋敷が中世の館で周りに堀があるというすごい名士がい

て、その巨大な邸宅の中にテニスコートがあって、そこで地域の名士がテニスをやっていたらしいのですが、小野市史を書いているときには、それをどう位置づけたらよいのかよくわからなくて、結局書けませんでした。

ともかく『小野市史』を通じて、地域のスポーツ文化が多様に展開していたことはわかった。当時の僕のイメージでは、スポーツというのは都市のモダニズム文化というものだったのですが、そうしたイメージはかなり揺らいだ。

## 2) 小田原地域研究

そのあと、今度は一橋にこられた森武麿さんを中心とする 1950 年代の研究会で、小田原をやろうという話になり、僕は文化を担当することになりました。ところが小田原地域の 50 年代の文化というのは難しく、どうしようかって思っていたとき、『小田原のスポーツ史』(小田原体育連盟、1969 年) という本を見たらすごく面白かった。僕は坂上さんとやったオリンピックの本の時も、地域スポーツ史を見ないと、と思って、古書店で手に入る限りの府県体育史を集めました。ほとんど使えなかった(笑)。府県体育史でよかったのは、石川県と福島県ですね。だいたい府県体育史は行政の人か学校の先生が書いているので、学校体育史みたいになっちゃうのですが、この『小田原のスポーツ史』は面白い。

小田原で面白いのは軟式庭球ですね。今でも小田原では硬式テニスよりも軟式テニスの方が偉いらしいです。小田原には益田信世という益田孝(三井の大番頭)の息子が住んでおり、文化やスポーツのパトロンとなっていたのですが、彼は小田原で軟式テニスの振興につとめました。益田は軟式庭球の全国組織の会長をつとめた人で、自分の土地にコートを作り、東京から優秀なテニス選手を招いて、小田原の軟式テニスの技術向上をはかっています。また旧制の小田原中学、今の小田原高校ですが、あそこはテニス中学なんです。小田原高校のクラブの中心は軟式テニス部ということが

伝統になっています。小田原の市役所とか政財界の有力者は小田原中学出身者で占められているので、この軟式テニスの流れってというのは、すごく意味があります。1955 年の第 10 回国体では、小田原が軟式テニスの会場になるのですが、それは戦前以来の流れに沿ったものであることが、よくわかりました。

陸上はまた文脈が違ってきます。『小田原のスポーツ史』の面白いところは、やたら固有名詞がでてくることです。読んでいる側はさっぱり分からないのですが、あの人とあの人はみたいに、固有名詞がいっぱい出てくるのが特徴です。これは書き手の人たちが続いているからでしょうが、ともかく陸上の人たちの方から言わせれば、戦前・戦後を通じて郡町村民にもっとも普及し、人気があったのは陸上競技だというわけです。その中心は青年団で『小田原のスポーツ史』は次のように書いています。

青年団の陸上競技は郡下 29 青年団対抗で、各町村はトラックの太鼓やのぼり、むしろ旗を積み、会場に繰りこんできたので、立すいの余地もない程賑やかなものであった。当時の青年はこの大会をめざして、2 ヶ月前頃から練習したようであるが、昭和 5 年から 10 年まで連続 6 回優勝した酒匂の青年は、小学校裁縫室に合宿し、夕方と朝方にかけて練習したということであり、選手のスパイク等は、他の青年団員が各支部毎に夜警をして得た金で購入したという。

こういうことをリアルに描いているスポーツ史は珍しいのですが、ともかく村の青年団の陸上競技熱は大したものだったようです。戦後になっても村の青年団のスポーツはやっぱり陸上競技で、50 年代まではこの流れが明らかに続いています。

この地域は箱根駅伝の地元なので、その影響もあるかと思えます。昔は箱根駅伝の選手たちは小田原近辺に合宿していて、村ごとにどこを応援するかって決まっていた。地元の人と結婚した人もいたらしいです。そういう影響もあってか、小

田原地域では陸上競技文化というのが、すごく盛んだった。『小野市史』のときにも気になっていたのですが、村の青年と陸上競技は、1920年代くらいから強く結びついていて、それが戦後のある時期まで続いていたことは間違いのないと思います。

野球はどうかというと、小田原の野球は町場のスポーツですね。軟式野球のクラブがいくつもあったようです。硬球もあったという話で、『小田原のスポーツ史』にはクラブ名がいっぱい出てくるんですけど、僕にはわからない。これはどこの町のクラブと書いてくれればいいのですが、本人たちは分かっているから、いちいち書いていないんです(笑)。今から調べるのはちょっと不可能に近いのですが、だいたい町場なんですね。そういう市街地の兄ちゃんたちの娯楽として野球があったようです。

テニスはこの中では、やっぱり一番エリートっぽいところであって、陸上は村の若者がやっていて、野球は町の若者がやっている。なんとなくそういうイメージができました。

### 3) スポーツをめぐるハビトゥスとソシアビリテ

種目によって担い手が異なるということは、ひとつはブルデューのいうところのハビトゥスの問題です。これはたとえばアメリカだと、エリートはアメフトをやって、庶民は野球に夢中というスポーツの階級性の問題につながります。日本社会の階級性はそれほど明確ではないのですが、それでもそうした問題が日本でもないことはない。

もうひとつは、スポーツがひとつの社会的諸関係の紐帯になっている問題です。ソシアビリテというのは、フランスのアナール学派の社会史の概念ですが、スポーツを通じてとり結ばれる人間関係というものは大きな意味を持っていると思われる。いわゆるスポーツ人脈です。

このふたつの問題が、『小田原のスポーツ史』を見ていて読み取れたんです。そういう議論が50年代論集(森武麿編『1950年代と地域社会』現代史料出版、2009年)で書けたわけではないのです

が、こういった問題は明らかに存在している。

## 3. 「スポーツの社会史」の可能性

### 1) 重層的・複合的なスポーツ界

だからスポーツの研究は、社会史的にやっぴかなければならない、と思っている次第です。それはスポーツ界の研究ということになるわけですが、スポーツ史という一番多いのはスポーツのルールとかの研究ですよ。そうではなくて、スポーツの社会史的な意味を問う研究はあまりないように思います。でもそれをやらないとだめだろうと思います。スポーツ学の人かやるのか、もしくは社会学の人かやるのか、歴史の人かやるのかで、多分違ってくると思うのですが、でもやらないといけなことは同じだと思うんです。しかしスポーツ界っていうのは、きわめて複雑で、重層的・複合的というか、一筋縄ではいかない構造があると思います。

スポーツ界の頂点を構成しているのは、エリート文化としてのスポーツですね。戦前でいうと中学校から大学・専門学校の学生とそのOBたちが作っている世界で、彼らはスポーツマンでありアスリートですが、当時、大学出の人は、たぶん2~3%ですね。極めて少数のエリートです。そういう人たちがやっているスポーツの世界です。でも地域のスポーツというのも明らかにあって、その主体は小学校とか青年団ですね。あと職場のスポーツというのもありますが、これらの関係をどう考えるかというのが大きな問題です。

複合的という面では、種目ごとの違いが無視できません。明らかに違っているのは野球で、プロ野球にせよ甲子園にせよ六大学にせよ、興行として成り立つ、お金がとれるんですね。だから、大日本体育協会に野球は入っていないですし、そもそも野球には全国組織がないわけですね。それでもやっぴける。他の種目はやっぴいけないから、体協の意味は大きい。野球を中心にスポーツを考えると多分間違える。野球は野球で、それ以外の

スポーツの意味を考えないといけないと思いますね。

今回「大日本体育会の成立」を書いたのですが、実のところ、あれは陸上競技連盟の機関誌・雑誌をもとに、陸連中心に見た戦時下のスポーツ像です。水連の方は見てないです。陸連と水連はものすごく仲が悪く、陸連は水連を目の敵にしているのですね。「水連が体協を牛耳っていて、常に我々陸連を抑えつけている」みたいな、かなり露骨な文章が出てきます。明治神宮大会で青年団が「陸上競技辞めます」といったとき、体協も陸連も反発します。水連も末弘巖太郎が一応批判しますが、実は、青年団の水泳競技は厚生省主催となった1939年の明治神宮大会の時から妙な競技に変わっています。潜って行ってレンガを運ぶとかですね(笑)。でも水連は反発しないんですよ。陸連は、それは陸上競技ではないと正面から反抗するのですが。こうした水連の動きはよくわからなかったもので、それを入れると話が変化する可能性もあります。

あと硬式と軟式の問題で、調べていてびっくりしたんですけど、今は明らかにテニスは硬式が主流で、うちのゼミなんかにも毎年硬式テニス部の「テニスは硬式だ」って思っている学生が必ず来ます。でも歴史的に見ればテニスの中心は軟式ですね。軟式連盟が出している本で『日本庭球史』という分厚い本がありますが、歴史的には日本は軟式の方が古くて、庭球人口は圧倒的に軟式の方が多かった。でも軟式の方はテニスではないと目されている。野球についてもそうですね。プロ野球と学生野球の研究はあるのですが、軟式野球の研究というのはほとんどないですね。全日本軟式野球連盟編『軟式野球史』(ベースボール・マガジン社、1976年)が唯一貴重な文献で、この研究史の空白をどうするのかという問題があると思います。

あとは体操ですね。ラジオ体操とか、30年代に隆盛を迎える体操とは何なのか。娯楽なのかアスリートなのかどうかよくわからない。そういうも

のを含みこんで、全体としてスポーツ界はどう成り立っていたのか。それを読み解いていく必要があると思います。

## 2) スポーツ政策の二重性

そういうことを前提に見ていくとスポーツ政策もややこしくて、戦後も含めて、スポーツ政策というのは常に話が分裂しちゃうんですよ。先ほどの重層的なあり方に対応していると思うのですが、ひとつはアスリートたちにとってのスポーツで、それは外来的なエリート文化ですね。戦時期に出てくるスポーツ批判はこの文脈で、日本主義者がスポーツを叩く。でも彼らはやっぱり劣位にあるんですよ。そういう連中が武道振興論を唱えるというのは、一種の擬似革命なんですね。国民体育論もそうで、エリートよりも「国民」が問題となるのは、スポーツそのものがかなり上層のものになっているからだと思います。

じゃあ下の方にいくとどういう話になるかということですけど、その問題が厄介です。当時の若者に一番人気があったのは相撲ですね。ラジオ体操もラジオ体操の会というのがあって、勝手にやっているんじゃない。東京の場合、明らかにラジオ体操の会は一種の政治運動化していて、ラジオ体操の会の下町のおじさんたちが何を批判するかというと、山の手の住民を批判します。要するに、山の手の連中はダメだ、ラジオ体操に出てこない(笑)。これも一種の擬似革命ですよ(笑)。それから『軟式野球史』しか手がかりがないのですが、軟式野球もすごく活気づいている。そういう話と、大日本体育協会をどうするかという話とは二重性があって、うまくつながってこないわけですね。

戦後もそうで、小田原でも見ましたが、スポーツを振興するというのはいったいどういうことか。アスリートのためのスポーツ施設を作ることがスポーツ振興なのか、それとも市民に広めていくことがスポーツ振興なのか。これは全然違う路線ですが、常にその話が並行して出てくるわけで

す。その二つの話を一応二つに分けたうえで両者の関係を考えるということをやっけていかないと、なかなか全体像が見えてこないと思います。

大政翼賛会ができて間もない頃に刊行されたパンフレットのなかに、末弘巖太郎の『新体制と体育運動』（大政翼賛会宣伝部、1940年）というものがあります。これは一読しただけでは、わけがわからない内容なんですね（笑）。体育新体制の話が書いてあると思いきや、そこで彼が論じているのは、教育の問題です。「従来の教育のあり方を改めないといけない」というわけで、素直に読めば、体位低下の一つの要因になっている知育偏重や受験競争の根源であるエリート主義的な教育体制を変えていくべきだ、と読めます。でもなぜこうした話が出てくるかという、日本社会の学歴ピラミッドというか、実際には頂点が2~3%しかないピラミッドですらない、小学校から先が極端に狭いエリート社会という問題と、先ほどお話したようなスポーツ文化のややこしい構造が対応していて、そこが変わらないことにはスポーツの極端な二元的性格っていうのは変わらない。末弘がこのことを意識して書いているようには思えないんですが、そういう構造を踏まえてこのパンフレットを読むと、新体制期に体協の中心人物が教育改革をしなければいかんと言っているのは、結構意味深長な発言だなと思った次第です。

### 3) 第3の道としての「職場スポーツ」?

もうひとつ日本のスポーツ史を考える上で重要なのは、職場スポーツの問題じゃないかと思えます。日本のスポーツ界を支えているのは、市民的アソシエーションではなく、かつ国家的なスポーツ振興政策でもなくて、結局どこが担っているかという企業ですね。こういう日本独特のスポーツのあり方がいつできてくるのか、ということを考えないといけないのではないかと。

今の職場の雑誌（『関西学院史学』）に何か書かないといけないので、調べてみたのですが、1930年代の後半から神戸新聞社主催で「神戸工場オリ

ンピック大会」というのが開催されていました。東京の場合だと、1930年代前半から東京工場協会と警視庁が同じような催しをだいたい4~5種目で開催しているのですが、兵庫県の場合は神戸新聞社が中心で、名前も仰々しく工場オリンピック大会（笑）。この催しは、神戸新聞社が主催なので神戸新聞にしか記事が載っていない。朝日新聞や毎日新聞には当然載ってないんです。こういうローカルな新聞社が主催するメディアイベント的な大会は、結構どこにでもあった可能性がある。ただ、地方新聞社がそれぞれの主催でやっている、全国紙は絶対に扱わない。普通、歴史研究者は朝日新聞しか見ないので（笑）、視野に入っていない。これはやっぱり問題です。朝日新聞をみると甲子園しか出てこないけど（笑）、結構いろんな催しがなされていた可能性がある。みんなが気付いてないだけかも知れません。

神戸新聞社がやったオリンピック大会は結構本格的で、明治神宮大会から数種目引いたぐらいのものです。神戸新聞社の主催者側発表の数字は明らかにおかしいので、参加者とか参加工場はいくつだったのかを検証するのにずいぶん手間がかかりましたが、なんとか合理的に読み解いていくと日中戦争が始まって一旦減るのですが、日中戦争下にかえって拡大していくんですね。40年~41年あたりの参加者が最大ですが、これは軟式野球を除いています。一番参加者が多いのは軟式野球です。軟式野球は希望工場が多いので、予選をやっています。当時の『神戸新聞』を見てみると、神戸にいくつも軟式野球のリーグ、局地的なリーグがあって、どこそで試合しているということがいっぱい記事に出てくるので、軟式野球がかなり広がっていることがわかります。それで野球は記事になるんですが、野球以外は記事にならない。しかしこの工場オリンピックを見てみると、球技部門とかどんどん参加者が増えていくし、陸上競技も種目が増えていく。これは面白いと思いました。

そういうなかで二つのスポーツの中心が出てき



ています。ひとつは川崎重工ですね。川崎重工のスポーツ部が確立していくのがちょうどこの時期で、陸上競技部が全国競技大会に進出するわけです。この段階で川崎が迎え入れるのが、ベルリンオリンピックで活躍した村社講平なんですね。村社が川崎に入って陸上部の選手になっちゃう。工場オリンピックには、村社が出場して兵庫県新記録を出しているんですね（笑）。

もう一つが大日本紡績の尼崎工場です。大日本紡績は戦後のユニチカです。戦後に尼崎のバレーボール部の中心は大阪の貝塚工場に移って「東洋の魔女」になりますが、その原型は日中戦争期にあって、大日本紡績が明治神宮大会で三連勝しています。この段階で関学出身の監督が行ってバレーボール部を強化する。西日本の優秀な選手を集めてきて全国優勝できるようなチームを作っちゃうんですね。そういう動きが日中戦争期、もしくはそのちょっと前から始まっていて、戦時期に戦後の実業団の原型ができつつあったということなのかな、と思いました。ちなみに実業団の最初の陸上競技大会も日中戦争期ですね。八幡製鉄と中島飛行機と住友、それに川崎が入って、4つの大企業中心に始めるんです。

それで今度は実業団のなかのアスリートという話になるんですが、そういう部分も含めてスポーツの底辺を増やしているわけです。そういう話が大日本産報のスポーツにつながっていくんだろうと思います。JRの東海道線で多摩川を渡るあたりに、大田区が多摩川六郷橋緑地があり、スポーツ公園となっています。『大田区史』を見てもらうと、もともとあそこにゴルフ場があって、あのスポーツ公園は多摩川べりにあったゴルフ場を大田区が買い取ってスポーツ公園にしたと書いてあります。

実はその前史があって、戦争中に「緑郷園」というスポーツ公園（錬成場）になっているんです。それをやったのが産報と健康保険連合組合で、昭和17年に完成しています。これは神奈川県と東京と両方が絡むんですが、産報が企画して、お金

は主に健保連が出して、かなり広いゴルフ場を買収して勤労者のためのスポーツ公園を作っている。これが戦後再びゴルフ場に戻っちゃうんですね。戻っちゃったものを粘り強い運動の結果、もう一度スポーツ公園に戻すということをやったわけです。『大田区史』では、きれいに戦前部分が消えています。このように戦争中の産報は、結構熱心にスポーツをやっていますが、そのバックにあるのはそれぞれの職場のスポーツ、企業のスポーツ熱の高まりだろうと思います。こうした問題をどう考えるかが重要ではないか、と思うんです。

スポーツ施設もそうで、厚生省の補助金で作っていくスポーツ施設については、今回の本で坂上さんも高尾さんも研究されたので、かなり明らかになったと思います。でも、たとえばすぐそこ（三鷹）にあった中島飛行機の武蔵工場、あそこは巨大な陸上競技場を持っていました。戦後は競馬場になりますけど（笑）。B29が撮った日本の空襲写真を見て目につくのは、大きな工場のわきには必ずと言っていいほど大きな運動場、もしくはスタジアムがあることです。しかしそれがいつできたのかは分からない。経済史研究もそんなことに興味を持っていない。でも明らかに日立であれ中島であれ、この時代日本の工場はスポーツ施設を持つようになっていくんですね。そういう問題が日本のスポーツ史研究ではすっぱり抜け落ちてしまっている。

そういう空白を埋めていく作業を積み重ねていくなかで、ようやく日本のスポーツ史の全体像が見えてくるんじゃないかなと思います。それはまた、日本の戦時体制、総力戦体制とはなんだったのか、ということを考え直していく一つの道筋にもなるだろうと思っています。

そんなところでまとまりがないのですが、「私の研究とスポーツ史」というお話は、とりあえず終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

## 【質疑討論】

坂上：質問、ご意見、どしどし出していただきたいと思います。

中澤篤史：戦前の時期については、どういう史料を用いて、体育・スポーツのとらえにくさ乗り越えていこうとお考えですか。

高岡：むしろ教えていただけるとありがたいのですけれど(笑)。今回の幻の東京オリンピックの研究で一番助かったのは陸連の雑誌ですね。『陸上日本』というのは、陸連そのものの雑誌ではないのですがかなり分厚い雑誌です。体協の出している『オリンピック』とか『体育日本』とは違って、陸上関係者のストレートな声が出ていると思いました。陸上ってこんな世界なんだというのを知る上で、すごく役に立ちました。水連も同じような雑誌を出してますし、テニスにもありますし、バレーボールにもあります。そういうものを分析するのがまず最初だと思います。時間がないのでまだやっていませんが、ぜひやっていただければと思います。

地域の方ですと、青年団の団報がありまして、それらをまとまって持っているのが信濃町の日本青年館です。そういう史料を見ていくと、どういう事業をやっていたのかを追っていくことができるはず。あとは地域の新聞ですね。僕は今回和歌山の新聞を使ったんですが、これは全然違う仕事で和歌山の新聞を見る必要があったので、その作業をしているついでに目に入ったものをチェックしてみました。そうすると、スポーツ行事というのは大きな新聞ネタになっていて、記事を拾っていくと、結構流れが追えますね。僕が見たケースでいうと、和歌山で最初にバスケットボールチームを作ったのはだれか、とかは新聞でわかります。そうやって丹念に見ていけば、いろんなことがわかるはずなんです。すごく面倒くさい作業で、生産性はすごく低いと思うんですが、そういう作業を積み重ねていく必要があると思います。手掛かりがないわけではない。ただしそれは大変だよ(笑)というところです。

金誠(札幌大学)：地域スポーツというとき、農村部のスポーツと都市部のスポーツの関連性や違いなどはどうでしょうか。

高岡：都市部の青年団も一応青年団ですので、一応同じことをやっているんですね。ただ、都市部に出てくる固有のスポーツというのがあって、テニスとかバスケットはやっぱり都市部の新中間層が担い手になっていますね。それに、都市の新中間層がやるというときは、自分のところの会社でコートとかを作っちゃうんですね。だけどそれは農村部にはなかなか広まっていけない。広まっていけるルートがあるとしたら小学校です。熱心な指導者がいれば強くなる。学校ルートを経由すれば農村部にも出てくるだろうと思います。ただ設備の面では、特に球技関係は都市部に限定されていたんじゃないかと思いますね。

今回の話で一番抜けているのは植民地で、例えば朝鮮、あと満州なんかはどうだと言われると、ぜんぜん違います。ある意味では日本の内地よりもスポーツが盛んっていうイメージがあります。

金：小学校を媒介にしてスポーツが普及するという場合、農村部における価値観とスポーツにおける価値観のコンフリクトというか、摩擦みたいなものが生じるかなと思いますが、そのあたりはどうなんでしょうか。

高岡：難しいですよ。よくわからないんですね。小学校で一生懸命バレーボールやっていた女の子がどうなったのかとかですね(笑)。たとえば、優秀な選手はそのまま紡績工場のバレーボール部に入ってくるということもあったのかもしれない。

農村部の価値観がどうだったのかという話ですけど、日本の農村社会のなかで、鹿野政直さんがかつて強調された反モダニズムみたいな流れも確かにあったとは思いますが。でもそれは農村部の人たちにとってルサンチマンの対象になるものについてであって、農村自体が近代を全面否定しているわけではないんですね。だから受け入れるということでは、陸上競技が一番入っているんですね。ただ陸上競技についていうと、明らかに農

村部のなかに反発はあるんです。まさにスパイクみたいな高価な物を買って、オリンピックのまねごとなどして怪しからん、という視線はやっぱりあって、日中戦争期に青年団が陸上競技から国防競技みたいなものに走る素地はそういうところにあります。単純ではないんですね。ただしなかなか史料的には確認できない。断片的な史料から、その痕跡は確認できるんですけど。

**坂上：**突き詰めれば、戦前期の農村社会のイメージが今までとは違うんじゃないか、ということスポーツの側から示すことになるんじゃないか、ということだと思っんですけども。もちろん、高津先生は、昭和恐慌以降に反モダンや農本主義的な中で、スポーツが排撃されていくということをかなり強調されたんですけども、トータルでそのあとの時期まで見たときに、本当に全面的否定だったのかとかね、冷静に見直す必要があるように感じます。

**岡本純也：**スポーツが入ってくる以前の農村の文化、祭りや日頃の娯楽というようなものと、近代になって入ってきたスポーツなどとの接続はうまくいったのか、それともうまくいかなかったのかをお聞きしたいですが。

**高岡：**そもそも何が伝統文化かというあたりがよくわからないんですね。想定されるのは例えば相撲ですよ。でも小野の場合を見ていて思ったのは、相撲文化の復興みたいなものが起こっている。定点観測をちゃんとやらないといけないんですが、完全につながっているのではなくて、どこかで断絶を含みながら、昭和期に出てくるんですよ。戦時期に一番盛り上がるのは相撲で、日中戦争期にもすごく広がる。ただし当時は双葉山時代です。当時の相撲復興は、マスメディアとの共振みたいな形で起こっている可能性もあると思います。

青年団もややこしい。以前の青年団研究は、日露戦後の地方改良運動などでどう変わるかという話を中心なんですけど、文化の話は入ってこない。でも実際には、青年団は案外モダンな組織で、彼らがやったのは弁論と文芸とスポーツ。修養団体

なんですけど、結構いろいろとやっているんですね。それはある意味で、時代のモダンな流れに乗っかっている。そうした流れはずっとあるんだろうと思います。だからどう接続しているのかというのは難しい話です。

結局、時期をもっとさかのぼって見直さないと、多分スポーツ文化の受容の問題は語れない。明治は違うと思うんです。明治にスポーツは入ってくるんですけど、たぶん地域社会にまで入ってくるのはもっと後で、たぶん第一次大戦期。その受け皿になっていくのが地域だと青年団。それは、明治神宮大会の創設とかぶってくる。そうすると、明治神宮大会とは何だったのか、という問題を見直す必要が出てくる。日本中の青年団が神宮大会目指して動き出すという事態が生じるわけですが、その意味を考え直す必要があると思います。

**坂上：**相撲は、京都の新聞を見ているだけでも大正期くらいからバツと出てくる。だから伝統文化として連綿と続いているというよりは、スポーツと同じくらいの時期にセットで人気が高まっていく感じがするんですね。だけどそんなことを書いている地域史がないからね（笑）。

**高岡：**明らかに断絶しているんですよ。地方にいくと力士の墓が方々にあります。江戸時代は、村の若者から江戸とか大阪の相撲で名をあげる力士が出てくる。そういう力士の墓が村にあったりするんですけど、そういう広範な草の根を持った相撲文化は、明治のどこかで絶える気がするんですね。そうじゃない形の相撲のあり方が、どこかの時点でスタートする、勝手なイメージですけど（笑）。伝統文化がもう一回再創造されるっていうかな。

**坂上：**研究されていない空白がいっぱい出てきますね。そのほかにどうでしょうか。

**仲沢隆（早稲田大学大学院）：**私は自転車競技の研究をしております、神戸工場オリンピック大会のなかで自転車が採用されているのを見て興味を持ちました。おそらくこの時代、まだ自転車競技がちゃんとした形で導入されていなかったと思

いますが、なぜ自転車競技を採用したのかという背景や、どのような形で行われていたのか、要するに競技用自転車を使ったのか一般用自転車を使ったのか、それから一般の道路で行われたのか競技場で行われたのか、そういうことがもしわかるようでしたら教えていただきたいのですが。

**高岡：**個別競技はちゃんと追っかけてないのですが、この時期は、日本で自転車競技が成立してくる時期ですね。日本自転車連盟の成立は 38 年のことです。東京オリンピックに間に合わせるために、北沢清が中心となって設立されます。日本の自転車競技は実用自転車から始まります。店員さんとかが中心で、そういうプロを排除したところで競技としての自転車が成立してくるという流れだったように思いますが、工場オリンピックの自転車競技っていうのは、そういう競技自転車を用いたものではなかったように思います。いわゆる競技用の自転車で専用のロードでやるというものではなかったと思います。もうちょっと初歩的な自転車レースでした。自転車競技そのものは、大衆的な、それも社会人的競技という性格が強いですね。

**仲沢：**おそらくこれが採用された背景は、日本の自転車産業の中心地が大阪の堺あたりだったということがあるんじゃないか、と僕は邪推をしていたんですけども。

**高岡：**あんまり直接的な関係はないと思いますが。あくまで神戸新聞社主催なので、神戸新聞のテリトリーの外まではいかない(笑)。堺は見えているんですけどね、大阪湾を挟んで(笑)。

ただ、自転車が重要だとは思っています。旅行雑誌を見ていると、サイクリング、自転車旅行がそのうち出てくるんですね。その最初の波が 30 年代でしょう。その中で自転車競技っていうのも成立してくるだろうと思うんですね。ただもう一歩先はどうか、というところとわからないですけど。

**坂上：**38 年には、自転車の国際連盟に加盟しますね。

**仲沢：**そうですね。そのくらいの時期に加盟して

いますね。

**坂上：**やっぱりオリンピック対策。

**高岡：**体協に入ってくるのもそこですね。

**坂上：**例えば福島なんかで見えても、明治末でもかなり大々的で本格的なロードレースをやっているんですね。

**高岡：**明治末なんですか。

**坂上：**本格的な、競技用の自転車を使っていますよ。

**高岡：**なんで明治の末にそんなことをやっているんですか。

**坂上：**そこそこ興行的に成立していたんだと思うんですね。一大イベント化しているんですね、明治末に。

**高岡：**それはヨーロッパ直輸入ですか。

**坂上：**輸入だったかな。

**仲沢：**ヨーロッパから輸入していますね、競技用に関しては。

**高岡：**すごいですね。

**坂上：**誰も研究していないからわからないですね。古書店あたりには、当時の自転車の販売カタログとか結構出ているんですが。

他に質問は。スポーツ史から離れて、戦時期研究でも構いません。

**中澤：**もともとはファシズム研究の一環としてファシズムを理解するために素材としてスポーツを戦略的に選ばれた、ということで、そのことによって丸山真男がというような福利厚生のあるあり方とは違う面やグラツィアが示したものと違う日本の固有性というものを描き出された、と理解しました。ただ、その時にはスポーツはあくまで素材であって、大目的はファシズム研究だということであつたと思いますが、これから進められようとしているスポーツの社会史については、どのようにお考えでしょうか。想定されている論者なり知見なりはどうイメージされているのかをお聞かせいただければと思います。

**高岡：**僕はもう「ファシズム論」をやる意味はないんじゃないかと思っているんですね。ある段階

までの日本の近現代史研究では、ファシズムって  
いう言葉を使わないと負けっという(笑)、すごい  
強迫感がありました。

ただファシズムって何って聞くと、これは難し  
いんですね。もともと共産党の中にだってファシ  
ズムか帝国主義かという議論はあったわけで、な  
んとなく天皇制ファシズムが通説になった。例え  
ば最近ドイツ史研究者も「ナチズム」というわ  
けです。「ナチズム」研究であって「ファシズム」  
研究じゃない。厳密な意味での「ファシズム」研  
究というのはイタリアファシズム研究ですね。イ  
タリアはファシスタ党ですから、ドイツとイタリ  
アは違うよという話ですね。日本のファシズムイ  
メージはナチスに引っ張られすぎているように思  
います。時代の流れの中で一つにくられちゃっ  
たわけですけど、本当はどうだったの、という  
形で研究が進んでいますよね。そうすると、それ  
ぞれファシスト党がありナチス党がある。じゃあ  
日本は何があるかというと、日本は戦時体制です。

それをファシズム論という形でくくっていくと、  
「ファシズムは」という主語に全部回収、収斂さ  
れちゃうんですね。そのことのデメリットの方が  
かなり大きいような気がします。ファシズム論は  
戦時期のものは全部だめだといっちゃい勝ちなん  
ですね。

僕は戦時下の日本は、基本的にはファシズムと  
呼んでいいと思っっているんですけど、むしろ問  
題はあの時代の日本があんなっちゃったのはなぜ  
かということ全体としてもう一度考え直すこと  
であって、社会史だといったのはそういうことな  
んですよね。むしろ我々は 20 世紀という時代の  
全体をどうやるとらえればいいのか、というこ  
とが今問われているはずなんですよ。

もともとファシズムとは、端的に言うと、社会  
主義の対概念なんです。資本主義が危機的状況に  
入ったという第三期論というのがかつてはありま  
して、20 世紀の第一次大戦後から資本主義は終わ  
りつつある、その中でファシズムと共産主義で対  
立するというのがマルクス主義の世界観です。そ

ういう前提のもとにファシズムがある。でもそれ  
は破産しましたから、全般的危機論というのを日  
本共産党が削除したのは 20 年以上前ですが、要  
するに資本主義の危機じゃない。資本主義はコン  
トロールしないとイケないシステムで、放ってお  
くと暴走しますから何とかしないとだめなんです。  
だけど、かつてのソ連型社会主義のようなシステ  
ムは無理だというのはみんな分かっちゃっている  
わけで、そういう時代において、20 世紀の革命な  
りファシズムなりというのは一体何だったのか、  
ということも 21 世紀の観点からとらえなおす必  
要があって、日本の場合には、もう一度社会の流  
れをいろんな角度からとらえなおしていく作業が  
必要で、その上でファシズムなり総力戦体制なり  
を位置付けるべきだ、というのが今の僕の考えな  
んです。

ですからその場合の論敵っていっぱいいますけ  
ど(笑)、要するに研究者はもういい加減に発想変  
えないとだめだよ、ということですね。古い方に  
はだいたい「高岡は間違っている」って言われま  
すけれど(笑)。ただ、最近の議論はすごく話が倒  
錯してきていますね。だから、いろんなものをち  
ゃんと取り去ったうえで、20 世紀の動きを位置づ  
けなおす。その場合、福祉国家、福祉社会という  
枠組みが必要になる。そこにスポーツをどう入れ  
るかは難しいのですけれども。もうひとつ別の枠  
組みは大衆社会ですね。近代化はあまり中身のな  
い概念ですけど、包括的概念としては重要で、  
あとは工業化、産業化を入れればいい。

ともかくいろんな発想、前提を捨てたほうがい  
いと思うんです。例えば「高度成長で豊かになっ  
てよかったね」というのは本当か、とかね。その  
あたりから問い直した方がいい。戦時期の問題は、  
実は第一次大戦ぐらいから 50 年くらいまでつな  
がっていると思うんです。基本的には同じ状況が  
あって、その前提は都市と農村の人口の比率が五  
分五分から 6:4 という状況。それが大きく変わ  
るのは高度成長期ですね。そこから後は一挙に農  
村が崩壊していくわけです。いつの間にか日本は

都市型社会になっちゃって、あとは過疎。高齢化社会なんていうのはとっくの昔に農村部では生じているわけですね。

だからもう一度日本の 20 世紀がたどってきた道っていうのを全体としてとらえなおす。その場合には、前提になっているようなものなど、いろんなものを捨てたほうがいい。

**坂上：**一気にでかい話になりましたけれども。中澤さんの質問は、スポーツを素材、あるいは、ひとつの媒体としてみたときに、どういう社会史が描けていく可能性があるのかということだっと思いますが、その場合はあくまでスポーツは素材、あるいは手段であったということでしょうか。それとは違うものは何か、ということですね。ある時には社会史という言葉を使わないで文化史ともいわれたりしますね。高岡さんはスポーツ界そのものに入っていき研究もされていて、ひとつのまとまりをもった世界なり、文化みたいなものかななり丁寧に大事に扱われている。そこでは、単に社会を見るための手段ではないようなところも意識されているのかな、という質問ではないかと思ったんですが。

**高岡：**すいません。自分自身が文化系サークルの人間なんで(笑)。だいたいサークルって文化系と体育会系に分かれていますよね。これは社会の基本かなと思っていて、体育会系・スポーツ系の社会というものが歴然と存在しているのだろうと思います。社会をどう見るかという点で、かつては階級分析していればよかったわけですけど、社会をリアルにとらえる上ではスポーツはとても重要な位置を占めていると思うんですね。

例えば、この作業をやっていてびっくりしたのは、翼賛会の宣伝部はラグーマンが集まっていて、まさにラグビー部なんです(笑)。産報の体育系はサッカー部なんです(笑)。これはやはりスポーツ人脈だと思いますね。体協の役員になっている内務官僚でも、彼らは訳もなくそこにいるんじゃないんですね。内務省の中のスポーツクラブでテニスの強豪だったり、それなりにみんなスポーツ

のキャリアがあって、そういうところでつながっている。そこにひとつのソシアビリテなり、アシエンションみたいな面がある。それはある意味でエリートの社会ですけど、だからこそ体協は強いんですね。体協の役員がこれだけ翼賛会に入っているのは、逆にいえば体協にそれだけエリートが多いということです。だから少々右翼方面から攻められても、あんまり揺るがないという面があるのかなと思います。

スポーツのつながりが持っている固有の意義というものがあって、クラブの先輩・後輩のつながりで就職する、大学入試でスポーツ推薦で入学する。そういう世界があるわけですから、それを見ておかないと日本社会が理解できないでしょうね。

かつての青年団でもスポーツを通じて人材が出てくる。たとえば戦後の文部省の体育局長になった佐々木吉蔵。彼は元々秋田の青年団の陸上選手で、結局文部省の局長にまでなってしまう。なぜそうなるのかというのは、スポーツ界を見て押さえておかないと説明できないですね。

一方で、文化史。これはまた全然違う視角ですが、社会にはスポーツのような領域がいくつか別々にあって、全体として成り立っているんだろうと思います。だから素材といえば素材なんですけど、スポーツには他にはかえがたい固有の世界がある。それは社会を理解するうえでは、とても重要な位置を占める。そういう領域だろうとは思っています。

**坂上：**はい。ありがとうございます。そのほかはいかがでしょうか。

**金：**先生の「総力戦と都市」という論文。日中戦争後に日本は景気が良くなる。その時に都市部ではいろいろな遊びが高じる。その中で厚生運動の役割が出てくる、というお話だったと思うんですけども、そのあたりの話をもう少しお聞きできますか。

**高岡：**今回は厚生運動の話は傍流でした。厚生運動というのはレクリエーション運動で、レクリエーション運動というのは大衆レベルの問題ですね。

今回扱ったのは大日本体育会なので、むしろアスリートたちのスポーツの話で、これは重なるようで重ならない。

1930年代の日本は、世界で最初に大恐慌から脱出したとはいえまだ不況期ですね。日中戦争期は跛行景気だといわれますが、基本的に景気はいいわけです。莫大な軍事費が散布されて、完全雇用もしくは人手不足です。そういうところで金回りの良くなった人たちがいっぱい出てくるのは間違いなくて、そういうなかで健全娯楽運動として厚生運動が出てくる。でもやっている連中はスポーツ系の人たちが多いですね。

そこに問題があって、国家権力によってスポーツが抑圧されていくという従来の枠組みはおかしくて、スポーツ界は強烈なナショナリズムを持っていますよね。自分たちがお国のために頑張っているんだという意識を強烈に持っていて、そういう意味で彼らはまさに大衆を指導しようとするんですね。厚生運動の担い手になったメンバーを見直していくと、いろんな人たちがいるので一概には言えないですけど、やっぱりスポーツ界の人たちかなと思うんですね。

厚生運動自体は、厚生省体力局の外郭団体の運動みたいなのところもあるので、時期が下っていくともう少しややこしい。いろんなものが入ってきてちやっって。ちょっとまとまりにくくなる。

それから、国民精神総動員運動は「べからず主義」で、みんなで儉約して我慢しましょうという話じゃまとまらないんです。あの論文では、厚生運動、レクリエーション運動のことを欲望の組織化みたいな言い方をしたと思うんですけども、従来の戦時期のイメージは精動運動なんですね。要するにみんなで我慢しましょう。でも、厚生運動には「よりよき生活様式」みたいなものが明確に出てくる。それは一種のモダンです。遊郭とか映画館にいくんじゃなくて、ハイキングして健康に過ごしましょうという。大阪でよく言われたのは、当時の大阪は工場が多く「煙の都」で非常に不健康なんですね。石炭時代で煤煙だらけで、外

に洗濯物を干していると一時間でまっ黒けになる不健康都市ですから(笑)。そういう前提を脇に置いて、清浄な郊外へハイキングへ行きましょうという話です。

それはやっぱり「ただ我慢しましょう」の話ではない。従来のファシズムのイメージはひたすら上から抑えつける、我慢していくというものだけだけど、あの時に書いたのは、そうじゃないよ、厚生運動を通じた日本のファシズムのイメージっていうのはちょっと違うんだよということを言いたかった。それは今でも間違っていないと思っています。

**金：**終戦期ではどうなんでしょうか。厚生運動の意味とか価値がそのまま継続されたとお考えでしょうか。

**高岡：**もうちょっと問題を広げたほうがよくて、今回書かなかったんですが、郷隆とか野津謙とか、陸上の浅野均一とか、彼らはスポーツ界のリーダーであると同時に医者なんです。彼らは別の論文で書いた「医界新体制」の方にも出てくるんですね。日本人の生活スタイルをも含んだ変革を推進していくグループです。野津が大政翼賛会の生活指導部から産報に入っていくという経緯はそういうことなんです。浅野も日本医師会の理事になっていきますので、日本の総力戦体制の中で生活の変革を推進することになります。そういう人たちが戦時期に、しかもアジア太平洋戦争期に入ってからかなり大きな力を持ったことは間違いありません。

ただ、それが主流になるかというところそうはならない。それを保障する条件がどんどん失われていきますから。スポーツ施設や病院を作ろうといっても物が無いというのが戦時下の実態です。42年あたりまでは、まだ理想を見ているんですね。しかし43年あたりからは今度は社会が崩壊していく。日本の社会は遅れているって進駐軍はいうわけですけど、それは最後の2年間ぐらいでそうなっちゃうんですね。41~42年ごろまでの日本はまた全然違う。最後の段階は日本の力がなくなっ

ちやいます。いかに戦争に勝つか、その一点だけ  
に変わっていきますから、日中戦争下で出てきた  
社会変革的な動きってというのは最後までいくわけ  
じゃないんですね。ですので、43年あたりが大きな  
転換点になるかなと。

**坂上**：スポーツを研究する意義として、いろんな  
ものがあるとは思いますが、さきほど言われた言葉  
でいうと、日本社会をよりリアルにとらえる、  
深くとらえるという上で重要な素材であるという  
ことだと思いますが、他分野・他ジャンルの研究  
で進んでいてモデルになるようなものがあれば紹  
介してほしいんですけど。

**高岡**：文化研究って全体的に進んでいないんです  
よね。そういう意味で先行しているのは音楽です  
ね。戸ノ下達也さんとは『文化とファシズム』以  
来の付き合いですが、彼が中心となって洋楽文化  
史研究会を作って、歴史学の人間と音楽学の人間  
の共同作業をずっとやってきていますね。

それから美術かな。特に戦時期の美術研究って  
この数年で急速に進みましたね。河田明久さんの  
研究は、この10年くらいの間で一番まとまった  
イメージを出しました。ただ、まだ作品と制作者  
論で、美術運動についてはこれからだと思います。  
今は戦時下の美術界がどうだったかという研究が、  
ようやく出始めたところという感じですね。

**坂上**：僕は全然知らないのですが、美術の領域で  
は戦争責任論みたいなものはどうなっているんで  
すか。

**高岡**：戦争責任論っていうのは、ある意味で答え  
は決まっているんですね(笑)。一応戦争責任は念  
頭には置いていますけどね。むしろ個々の画家た  
ちの内在的な論理というところに着目していか  
ないと、やっぱり研究としては成り立たない。

僕は、戦争中に何かしているとだいたい戦争責  
任があるのは当然で、戦時体制にコミットメン  
トしたことが、結局マイナスになっていくとい  
うのは間違いないと思うんです。ただ、戦争責  
任を明らかにするために研究することは、僕自身  
はあまりやらない。不毛だろうなという気がする。

**坂上**：そろそろ時間になりました。ありがとうござ  
いました。

**尾崎**：高岡さん、貴重なお話ありがとうございました。  
私たちにとっても目を開かされるような事  
実も含めて中身の濃いお話をいただきました。そ  
の後の討論もいろいろ多岐にわたっていたと思  
います。本日はありがとうございました。